

複合動詞後項の表記の経年変化

——BCCWJを資料として——

小 椋 秀 樹

一 はじめに

日本語は、複数の文字体系を用いること、正書法を持たないことから、語表記のゆれが多く見られる。この語表記のゆれの実態、例えば、語表記のゆれがどの程度見られるのか、どのような語群に語表記のゆれが多いのか（反対に、語表記のゆれが少ないのか）といったことについては、一九五〇年代、一九九〇年代発行の雑誌や、一九六〇年代発行の新聞を対象とした計量的な面からの調査があるものの、その後、より現在に近い時期を対象とした調査はなされてこなかった。そのため、現代日本語における語表記のゆれの実態は、十分に明らかにされていないと言えない状況にあった。

このような問題意識から、小椋（二〇一一）では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJとする。）のコーデータ²を資料として語表記のゆれに関する調査を行った。小椋（二〇一

二）では、和語に語表記のゆれが多く見られること、和語の中でも動詞が語表記のゆれの割合の高い語群であることを明らかにした。さらに動詞を対象に、どのようなゆれの類型があるのかも調査し、漢字と平仮名の対立によるゆれ（例…「合う—あう」）が最も多いことを指摘した。漢字と平仮名の対立によるゆれは、語表記にゆれのある単純動詞の約七割に、同じく複合動詞の約八割に見られた。

小椋（二〇一一）は、現代を対象とした、共時的な視点からの調査である。しかし、終戦から現代までの間に、漢字政策の改定、情報機器の普及など、書き言葉をめぐる環境は大きく変化している。それに伴って語表記のゆれにも変化が見られると予想される。共時的な視点からの調査だけでなく、経年変化も明らかにしていくことが重要な課題といえる。

そこで本稿では、語表記のゆれが多く見られる語群である複合動詞を取り上げ、BCCWJに収録されたレジスターのうち、一九八六年から二〇〇五年の二〇年の年代幅を持つ図書館・書籍を資

料として語表記のゆれの経年変化を明らかにする。

以下、二節で本稿の目的を述べる。続いて三節で今回の調査対象とする統語的複合動詞の後項動詞の範囲、調査資料とするレジスター、調査方法について述べた後、四節で調査結果を報告する。最後に五節で本稿をまとめる。なお本稿では、語の表記を示す際には「出す」「だす」のように鍵括弧を付け、語を示す際には《ダス》のように語を片仮名で表記した上で二重山括弧を付ける。また語を特定しやすくするために《アウ(合)》のように漢字を丸括弧に入れて示す場合がある。

二 目的

動詞+動詞型の複合動詞は、後項動詞の意味・機能によって、語彙的複合動詞(例:「洗い落とす」「放り投げる」と統語的複合動詞(例:「降り出す」「扱い兼ねる」)の二種類に分類される。語彙的複合動詞は、後項動詞が元の語彙的な意味を持つている。一方、統語的複合動詞は後項動詞が文法的な意味を担っている。

小椋(二〇一二)は短単位を用いた調査であるため、ここではいう複合動詞とは語彙的複合動詞を指している。短単位では、最小単位二つから成る語彙的複合動詞は「食べる歩く」「走り回る」のように一短単位とするが、統語的複合動詞は「降り出す」「調べ/尽くす」のように前項動詞、後項動詞をそれぞれ一短単位とする。そのため小椋(二〇一二)では、統語的

複合動詞を構成する前項動詞、後項動詞を単純動詞として集計してしまっている。統語的複合動詞についても、語彙的複合動詞と同様に漢字と平仮名の対立による語表記のゆれが多く見られるのかが実態を調査する必要がある。

ところで、「洗い落とす」「放り投げる」「降り出す」「扱い兼ねる」のような複合動詞を書き表す際、後項動詞を平仮名書きにした表記を目にすることがある。特に「…出す」「…し始める」の意)「…兼ねる」(「…しにくい」の意)のような統語的複合動詞の後項動詞は、元の動詞が持つ実質の意味を失っているため、漢字で書くことに違和感を持つ人もいるようである。

統語的複合動詞の後項動詞の表記については、表記辞典を見ると、常用漢字で表記できても、一般的な表記として平仮名表記を挙げるものがある。例えば、白石、野元、高田(二〇一〇)には、次のような例がある。

かねる	かねる、兼ねる	例	申し上げかねる、母の帰りを待ちかねる
すぎる	…すぎる、…過ぎる	例	考えすぎる、食べすぎる、飲みすぎる、気にしすぎる
だす	…だす、…出す	例	雪が降りだす、勉強をやりだす、笑いだす

白石、野元、高田(二〇一〇:二)は、「常用漢字・現代仮名

遣い・送り仮名の付け方を原則とする、一般的と考えられる書き表し方を、ゴシック体で示している。右の例では、常用漢字「兼」「過」「出」による表記ではなく、平仮名表記を「一般的と考えられる書き表し方」として示していることになる。このような基準の妥当性を検証する意味でも、統語的複合動詞の表記の実態、特に後項動詞を漢字表記にするか、仮名表記にするかについて調査を行う必要がある。また、前節にも述べたように、終戦から現代までの間の書き言葉をめぐる環境の変化から、表記のゆれに変化が見られるのか否かも明らかにしていく必要がある。

以上のことから、本稿では BCCWJ を資料として、複合動詞のうち統語的複合動詞を取り上げ、特にその後項動詞に着目して、計量的な面から表記のゆれと、その経年変化を調査することとする。なお本稿では、小椋(二〇一三)の結果を踏まえ、漢字と平仮名の対立によるゆれのみを取り上げることとする。したがって、送り仮名の対立によるゆれや仮名遣いの対立によるゆれなどは取り上げない。

三 調査対象・資料・方法

三・一 調査対象

統語的複合動詞の特徴の一つに後項動詞が限定されるということが挙げられる。統語的複合動詞の後項動詞として、影山(一九九三・九六)では《カケル》《掛》《ダス》《ハジメル》など七

語を挙げており、姫野(一九九九・一九)では、更に《カカル》《掛》《ハテル》《ソコネル》の三語を加えている。

短単位では、統語的複合動詞の後項動詞を付属要素(接尾的要素)として扱い、「〳〵降り/出す」〳〵調べ/尽くす〳〵のように前項動詞と結合させずに単独で一短単位とするのを原則としている。

ただし例外もあり、影山(一九九三)、姫野(一九九九)で示された三〇語全てを付属要素(接尾的要素)としているわけではない。BCCWJ における出現状況から造語力が高いと判定しなかったもの、単位認定が難しいと判断したものについては、付属要素(接尾的要素)とはしなかった。これに該当するのは、《アウ》《合》《アキル》《カケル》《カカル》《ノコス》《アヤマル》《誤》《ナオス》(直)の七語である。

一方、影山(一九九三)、姫野(一九九九)で統語的複合動詞の後項動詞として挙げられていない語であっても、BCCWJ における出現状況、単位の統一性などから付属要素(接尾的要素)に加えたものもある。例えば、《サス》(止)《ハテル》など七語である。

以上のようなことから、本稿で調査対象とする語は、影山(一九九三)、姫野(一九九九)と若干異なるところがある。本稿で調査対象としたのは、次の三〇語である。

A・影山(一九九三)、姫野(一九九九)に挙げられている語

アグネル(あくねる)	エル(得る)	オエル(終える)
オクレル(遅れる)	オワル(終わる)	カネル(兼ねる)
キル(切る)	コナス(熟す)	スギル(過ぎる)
ソコナウ(損なう)	ソコネル(損ねる)	ソビレル(そびれる)
ソソズル(損ずる)	ダス(出す)	ツクス(尽くす)
ツケル(付ける)	ツツケル(続ける)	トオス(通す)
ナレル(慣れる)	ヌク(抜く)	ハジメル(始める)
マクル(捲る)	ワスレル(忘れる)	

B・影山(一九九三)、姫野(一九九九)に挙げられていない語

オオセル(果せる)	カワス(交わす)	サス(止す)
ツヅク(続く)	ハタス(果たす)	ハテル(果てる)
ワタル(渡る)		

本稿では、影山(一九九三)、姫野(一九九九)で統語的複合動詞の後項動詞として挙げられていない語も合わせて調査対象とすることから、以下、右の三〇語を後項動詞とする複合動詞を、統語的複合動詞等と呼ぶ。

三・二 資料

BCCWJのレジスターのうち、一定の年代幅を持ち、経年変化を見ることのできるものとして、図書館・書籍(一九八六～二〇〇五年)、特定目的・ベストセラー(一九七二～二〇〇五年)、同・白書、同・法律、同・国会会議録(以上、一九七六～二〇〇五

年)が挙げられる。このうち、特定目的・白書、同・法律、同・国会会議録は公文書であり、国が定めた表記の基準に従って書かれている。白書・法律には用語の基準もある。これらのレジスターについては、仮に経年変化が見られたとしても、表記や用語の基準の改定によるものという可能性もあるなど、一般社会における表記の変化を見るには不向きといえる。特定目的・ベストセラーは、多くの人々に読まれたものとして重要なレジスターではあるが、延べ語数が約三七〇万語と、データ規模の面で問題がある。

以上のようなことから、本稿では、資料として図書館・書籍を用いることとした。図書館・書籍では、東京都内の一三自治体以上に共通して所蔵されている書籍を母集団としてサンプルを抽出している。書き言葉の流通という側面に着目したもので、より多くの人に読まれた(と考えられる)書き言葉と位置付けられる。図書館・書籍は、全体で延べ約三〇〇万語と大規模なデータである。五年ごとに区切った場合、最も語数の少ない一九八六～一九九〇年で延べ約四八〇万語、最も語数の多い二〇〇一～二〇〇五年で延べ約八八〇万語と、経年変化を見るのにも十分な規模のデータといえる。

三・三 方法

用例の収集に当たっては、短単位データ一・〇・〇を対象に、『中納言』一・一・〇により、次の検索条件式で検索した(例と

して《カネル》の検索条件式を示す。

```
キー：語彙素="兼ねる" AND 前方共起:(品詞 LIKE "動詞%"  
AND 活用形 LIKE "連用形%") ON 1 WORDS FROM キー IN  
(registerName="図書館・書籍" AND core="false") WITH OP-  
TIONS unit="1" AND tglWords="10" AND limitToSelfSen-  
tence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND  
encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"
```

本稿は、漢字と平仮名の対立による語表記のゆれの実態を把握することを目的としている。その際、注意しなければならないのは、児童向けの書籍の用例である。当然のことながら、児童向けの書籍の表記には、平仮名が多用されており、児童向けの書籍に多く使われている語は、平仮名表記の割合が高くなる可能性がある。そのため児童向けの書籍の用例を除外する必要がある。

児童向けの書籍の用例を除外するために、BCCWJのDVDに格納されている書誌情報データベースを利用した⁵⁾。書誌情報データベースでは、書籍のジャンル情報の一つとしてCコード(図書分類コード)が記載されている。Cコードは四桁の数値で、左から一桁目が対象読者を示す「販売対象コード」である。児童向けの書籍は、この一桁目が「8」となっている。このCコードの情報を使って児童向けの書籍の用例を除外した。

具体的には、各後項動詞の検索結果を統合した後、関係データ

ベースにインポートした。次にサンプルIDベース書誌情報データ(joinnd_info.txt)を関係データベースにインポートし、サンプルIDで検索結果と関係付けて、検索結果にCコードの情報を付与し、児童向けの書籍の用例を除外できるようにした。

四 調査結果

四・一 後項動詞の表記のゆれ

本節では、後項動詞の表記の実態について、漢字表記、平仮名表記がそれぞれの程度用いられているのか見ていくこととする。先に述べたように図書館・書籍は、出版年で二〇年の幅を持つレジスターであるが、ここでは一つの共時態と見なして(年代幅を無視して)調査する。

三〇語の後項動詞について、漢字表記、平仮名表記がそれぞれの程度用いられているかを、表1にまとめた。表1では、後項動詞を度数順に配列した上で、漢字表記、平仮名表記の度数と、それぞれの表記が語の度数全体に占める割合とを示した(「漢字」「平仮名」の各欄)。表記にゆれの見られる語の中には、漢字表記、平仮名表記のいずれかに集中しているものがある。例えば、《カネル》《コナス》は平仮名表記が九割を超えている。そこで、ゆれの程度に応じた分類を試み、種別欄に示した。ゆれの見られない語を「固定」、一方の表記が八割以上を占めている語を「独占」、それ以外を「ゆれ」と呼ぶこととした。⁶⁾

表1 後項動詞の表記

	度数	漢字		平仮名		種別
ハジメル	6967	3352	48.1%	3615	51.9%	ゆれ
ツヅケル	4824	2925	60.6%	1899	39.4%	ゆれ
エル	4730	1769	37.4%	2961	62.6%	ゆれ
ダス	3070	1660	54.1%	1410	45.9%	ゆれ
キル	2843	778	27.4%	2065	72.6%	ゆれ
スギル	2015	463	23.0%	1552	77.0%	ゆれ
カネル	1243	36	2.9%	1207	97.1%	独占
ツクス	671	365	54.4%	306	45.6%	ゆれ
オワル	634	568	89.6%	66	10.4%	独占
ワタル	578	272	47.1%	306	52.9%	ゆれ
オエル	462	404	87.4%	58	12.6%	独占
ハテル	423	301	71.2%	122	28.8%	ゆれ
ヌク	390	272	69.7%	118	30.3%	ゆれ
マクル	384	4	1.0%	380	99.0%	独占
ナレル	355	297	83.7%	58	16.3%	独占
トオス	230	168	73.0%	62	27.0%	ゆれ
コナス	181	1	0.6%	180	99.4%	独占
ワスレル	153	150	98.0%	3	2.0%	独占
オクレル	113	96	85.0%	17	15.0%	独占
カワス	113	73	64.6%	40	35.4%	ゆれ
ソコナウ	100	36	36.0%	64	64.0%	ゆれ
ハタス	90	76	84.4%	14	15.6%	独占
ツヅク	84	55	65.5%	29	34.5%	ゆれ
オオセル	47	0	0.0%	47	100.0%	固定
ソコネル	47	21	44.7%	26	55.3%	ゆれ
アグネル	40	0	0.0%	40	100.0%	固定
ソビレル	39	0	0.0%	39	100.0%	固定
ソンズル	23	23	100.0%	0	0.0%	固定
ツケル	13	0	0.0%	13	100.0%	固定
サス	12	0	0.0%	12	100.0%	固定

「固定」を見るとき、「ゆれ」に属する語は中頻度層・低頻度層に多く、「独占」に属する語は高頻度層に多いことがわかる。

ただし生起頻度が低いと、偏りが生じるため、「独占」「固定」と頻度との関係は当然の結果と言える。そこで以下、度数四〇〇以

上を高頻度と見なし、高頻度の語群について見ていくこととする。

度数四〇〇以上の語は、《ハジメル》《ツツケル》《エル》など一二語である。このうち、「ゆれ」に属するのは九語、「独占」に属するのは三語である。よく使われる語ほど、表記にゆれが生じることができよう。宮島（一九九七・二〇〇）でも、「度数順にみると、当然度数一のものにはゆれがなく、度数のたかいものほど、これがおおい」述べられている。本稿は、統語的複合動詞等の後項動詞に限定した調査ではあるが、宮島（一九九七）と同様の傾向が確認できた。

「ゆれ」に属する九語のうち、漢字表記の割合が高い語は《ツツケル》《ダス》《ツクス》《ハテル》の四語で、平仮名表記の割合が高い語は《ハジメル》《エル》《キル》《スギル》《ワタル》の五語である。「独占」に属する語のうち、漢字表記に集中する語は《オエル》《オワル》、平仮名表記に集中する語は《カネル》である。

四・二 後項動詞の表記の経年変化

本節では、後項動詞の表記について、漢字表記、平仮名表記の割合に経年変化があるのかを見ていく。

まず、出版年代別の経年変化を見ていく。図1に、出版年代別の後項動詞の漢字表記、仮名表記の割合を示した。この図では、出版年が一九八六～一九八九年のものを八〇年代後半、一九九〇

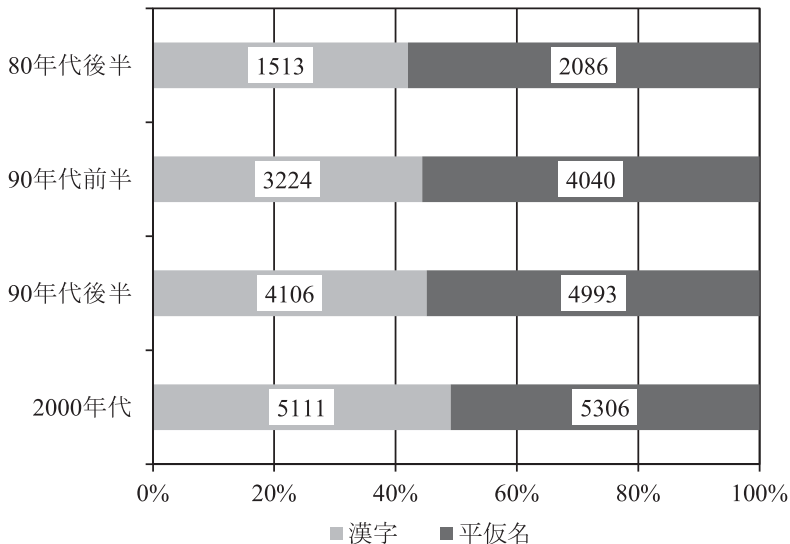


図1 後項動詞の表記の変化（出版年代）

一九九四年のものを九〇年代前半、一九九五～一九九九年のものを九〇年代後半、二〇〇〇～二〇〇五年のものを二〇〇〇年代と、四つの年代に区分した。語別に漢字表記、平仮名表記の割合を算出するのではなく、年代ごとに全ての語の漢字表記、平仮名表記の度数を合計した上で、漢字表記、平仮名表記の割合を算出している。なお、その際、度数一〇〇以下の低頻度の語群を除外して集計した。

図1を見ると、年代が下るにしたがって、徐々に漢字表記の割合が高くなっていることが分かる。図1の用例数を基に漢字表記の割合を求めると、八〇年代後半は四二・〇％であったが、九〇年代前半は四四・四％、九〇年代後半は四五・一％、二〇〇〇年代は四九・一％となる。二〇〇〇年代には、漢字表記が平仮名表記と拮抗するまでになっているのである。

次に、著者の生年代別の経年変化を見ていく。図2に、著者の生年代別に後項動詞の漢字表記、仮名表記の割合を示した。図1と同様に、年代ごとに全ての語の度数を合計した上で、漢字表記、平仮名表記の割合を算出しているが、その際、著者が複数のサンプルの用例は集計の対象外としている。また、語の度数の合計が三〇〇以上の年代を図に示した。

図2を見ると、一八九〇年代生まれのグループから一九一〇年代生まれのグループまで、漢字表記の割合が低下するが、その後は一九七〇年代生まれのグループまで漢字表記の割合が増加傾向にある。一九五〇年代以降のグループは、一九五〇年代生まれの

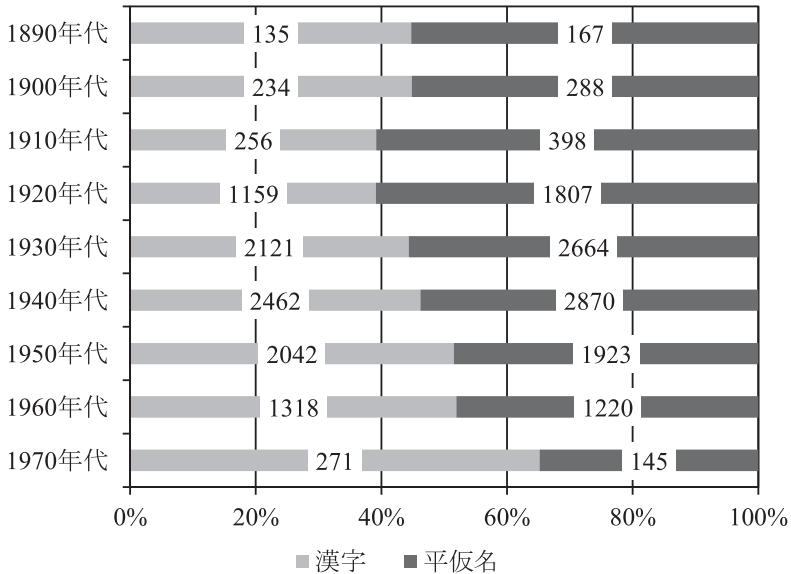


図2 後項動詞の表記の変化 (著者生年代)

グループが五一・五%、一九六〇年代生まれのグループが五一・九%、一九七〇年代生まれのグループは六五・一%と、いずれも漢字表記が過半数を占めている。ただし一九七〇年代生まれのグループは、全体の度数が四一六と少ないため、慎重に見る必要はある。とは言え、度数が二〇〇〇を超える一九五〇年代、一九六〇年代生まれのグループで漢字表記の割合が五割を超えており、増加傾向にあることは指摘できる。

四・三 考察

四・三・一 表記のゆれについて

図書館・書籍の一つの共時態と見なした上で、度数四〇〇以上の高頻度語（一二語）を対象に表記のゆれの実態を見た。度数二〇〇〇以上の五語は全て「ゆれ」に属しており、高頻度語ほど表記にゆれが見られることが確認できた。

ところで、表記にゆれが見られるといっても、漢字表記の割合が高い語もあれば、平仮名表記の割合が高い語もある。「ゆれ」に属する語だけでなく、「独占」に属する語も含めると、漢字表記の割合が高いのは《ツツケル》《ダス》《ツクス》《ハテル》《オエル》《オウル》で、平仮名表記の割合が高いのは《ハジメル》《エル》《キル》《スギル》《ワタル》《カネル》である。漢字表記、平仮名表記のどちらがより選択されるかについては、意味の問題が関わっていると考えられる。

統語的複合動詞等の後項動詞は、姫野（一九九九：二八）が

「接尾辞的複合動詞」と呼ぶことから分かるように、意味が希薄化し、格関係もほとんど失われて、補助的な役割を担う語となっている。例えば、《ダス》《エル》《キル》《カネル》といった語は、元の動詞の意味がかなり希薄化しているといえる。しかし、その一方で、《ツツケル》《オエル》《オウル》《ハジメル》は、意味が希薄化しているといっても、《ダス》などよりは、その度合いが薄い語といえよう。

このように意味の面から見ると、平仮名表記の割合が高いのは《エル》《キル》《ワタル》《カネル》のように意味が希薄化した語であり、漢字表記の割合が高いのは《ツツケル》《オエル》《オウル》のように意味の希薄化の度合いの薄い語であるという傾向を指摘できそうである。ただし、漢字表記の割合が高い語の中にも《ダス》のような語があり、一方、平仮名表記の割合が高い語の中にも《ハジメル》のような語もあることから、表記の選択に関して意味の面からだけで説明ができるわけではない。他にも漢字のなじみ度のようなものが関わっていることも考えられる。今後、様々な観点から考察を深めていく必要がある。

四・三・二 経年変化について

統語的複合動詞等の後項動詞の表記について、出版年代別、著者年代別の調査結果を見ると、漢字表記が増加する傾向にある。この変化の要因としては、漢字政策の改定、書記環境の変化が挙げられる。

漢字政策について注意したいのは、漢字表が改定されるたびに

訓の追加が行われているということである。具体的に見ていくと、当用漢字音訓表（一九四八年、内閣告示第二号、同訓令第二号）には一一一六の訓が掲げられていた。その後、一九七三年に改定された当用漢字音訓表（内閣告示第一号、同訓令第一号）では一三八七に、常用漢字表（一九八一年、内閣告示第一号、同訓令第一号）では一九〇〇に増えた。二〇一〇年に改定された現在の常用漢字表（内閣告示第二号、同訓令第一号）では二〇三六に増えている。

漢字政策の改定（字種の追加削除、音訓の追加削除）は、漢字使用の実態を踏まえて行われる。新しい漢字表に訓が追加されるということは、その訓（和語）が平仮名表記ではなく漢字表記される傾向にある（若しくは漢字表記が定着している）ということである。また漢字表に訓が追加されることによって、漢字表記が一層増加していくこともある。

当用漢字表の漢字選定の目安に「訓だけのものもしくは、おもに訓だけを使うものは省く」（文部省一九五三・二）という項目があることから、終戦後の漢字政策では、漢字制限の立場から、和語は基本的に平仮名表記でよいという考え方があったものと思われる。その後、右に見たように訓の追加が行われており、常用漢字表では「異字同訓はなるべく避けるが、漢字の使い分けのできるもの及び漢字で書く習慣の強いものは取り上げる。」（文化庁一九八二・一四五）という字種選定の方針が示されるに至った。終戦後の国語改革における和語は平仮名書きという考えは定着せ

ず、和語の漢字表記が増加していったと考えられる。

さらに、改定常用漢字表（二〇一〇年二月、文化審議会答申）において、「情報機器による漢字使用が一般化し、社会生活で目にする漢字の量が確実に増えていると認められる」（三三）頁」と述べられているように、近年、情報機器の普及という書記環境の変化に伴って、漢字が多用される傾向にあるといわれる。今回調査した図書館・書籍は、一九八一年の常用漢字表（内閣告示第一号・同訓令第一号）の実施から二〇一〇年の改定までの二九年間のうち、二〇年をカバーするレジスターであり、まさに情報機器が普及していく時期に当たっているのである。

以上のように、漢字政策の改定により和語を漢字表記するという方向が進められていったこと、情報機器の普及による漢字の多用化ということ、これら二つの言語的要因が、統語的複合動詞等の後項動詞の漢字表記を増加させていると考えられる。

五 終わりに

本稿では、BCWJの図書館・書籍を資料として、統語的複合動詞等の後項動詞の表記のゆれ、特に漢字と仮名の対立による語表記のゆれについて実態調査を行った。その結果、高頻度語ほど、表記にゆれが生じていること、出版年別の経年調査、著者の生年代別の経年調査のいずれにおいても、年代が下るにしたがって、漢字表記の割合が高くなることが分かった。また、今回は後

項動詞の表記のみの調査ではあったが、調査結果を見ると、統語的複合動詞は、語彙的複合動詞と同様、語表記にゆれが多いと言えよう。

今後の課題としては、まず語別に経年変化を見ていくことも必要であろう。その際、単純動詞として用いられた場合の表記についても調べていく必要がある。本稿では、漢字表記の増加傾向の要因として、情報機器の普及を挙げたが、これについては状況証拠にとどまるという見方もある。したがって、特定目的・知恵袋、特定目的・ブログというウェブデータを対象とした調査も必要である。今後の課題としたい。

なお、二節で取り上げた《カネル》《スギル》《ダス》の表記の基準については、本稿の結果からいえば、《カネル》《スギル》は平仮名表記を一般的な表記とするのは妥当である。しかし《ダス》については、漢字表記が約五四%、平仮名表記が約四六%でゆれており、本稿の結果からは、どちらが一般的か決めることは難しい。表記の基準を考えるためにも、本稿のような実態調査を行っていく必要がある。

注

(1) 語表記のゆれに関する実態調査としては、次の三つが挙げられる。

宮島達夫(一九九七)『一九五六年発行雑誌九〇種の調査』

国立国語研究所(一九八三)『一九六六年発行朝日・毎日・読売三紙の調査』

国立国語研究所(二〇〇六)『一九九四年発行雑誌七〇誌の調査』

(2) BCCWJ の設計等については、前川(二〇〇八)、山崎(二〇一)を参照。

(3) 短単位の認定基準のうち和語の動詞については、小椋、小磯、富士池(二〇一・二九)を参照。

(4) 付属要素、及び短単位の認定における付属要素の扱いについては、小椋、小磯、富士池(二〇一・三三三、(三三八)～(三五五)を参照。

(5) 書誌情報データベースについては、丸山、中村(二〇一)を参照。

(6) この三区分は、一九五六年発行の雑誌九〇種を対象に、語表記のゆれを調査した宮島(一九九七)を参考にしたものである。ただし宮島(一九九七)は、「独占」を「特定の形式が九割以上をしめているもの」(一〇三頁)としており、本稿と異なる。

(7) 当用漢字音訓表(一九四八年、一九七三年)の訓数は文化庁(二〇〇五・三〇五、五七〇)に、常用漢字表(一九八一年)の訓数は前田、阿辻編(二〇〇九・二六三)による。常用漢字表(二〇一〇年)の訓数は筆者が集計した。

謝辞 本稿は、第六回コーパス日本語学ワークショップ(二〇

一四年九月一〇日、国立国語研究所)におけるポスター発表に基づくものである。貴重なコメントを頂いた方々に感謝申し上げます。なお本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト(基幹型)「コーパス日本語学の創成」(リーダー…前川喜久雄)、同「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」(リーダー…相澤正夫)、JSPS 科研費「大規模コーパスに基づく現代語表記のゆれの実態解明」(代表者…小椋秀樹)による補助を得た。

参考文献

小椋秀樹(二〇一七)「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査—BCWJコーデータを資料として—」、『第一回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、三二二～三二八頁

小椋秀樹、小磯花絵、富士池優美、宮内佐夜香、小西光、原裕(二〇一七)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第四版(下)〔国立国語研究所内部報告書〕

影山太郎(一九九三)『文法と語形成』、ひつじ書房

国立国語研究所(一九八三) 国立国語研究所報告七五『現代表記のゆれ』

国立国語研究所(二〇〇六) 国立国語研究所報告一二五『現代雑誌の表記—一九九四年発行七〇誌—』

白石大二編、野元菊雄新版監修、高田智和改訂新版監修(二〇

一〇)『例解辞典 改訂新版』、ぎょうせい

姫野昌子(一九九九)『複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房

文化庁(一九八二)『国語審議会報告書 一四』、ぎょうせい

文化庁(二〇〇五)『国語施策百年史』、ぎょうせい

前川喜久雄(二〇〇八)『KOTONOHA』現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発』、『日本語の研究』(四)一、八二～九五頁

前田富祺、阿辻哲次編(二〇〇九)『漢字キーワード事典』、朝倉書店

丸山岳彦、中村武範(二〇一七)第八章 書誌情報データベース』、国立国語研究所コーパス開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き』第一・〇版、一七～一五二頁

宮島達夫(一九九七)『雑誌九十種表記表の統計』、『日本語科

学』一、九二～一〇三頁

文部省(一九五三)『国語問題問答』、光風出版

山崎誠(二〇一七)第二章『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計』、国立国語研究所コーパス開発センター『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き』第一・〇

版、一三～二〇頁

(おぐら・ひでき 本学教授)